

語られることばの広がり

—引用・伝聞の働きを考える—

三 枝 令 子*

1. はじめに

- (1) 「日常いたる所で我々は話者とその言葉について語られることばを耳にする。次のように言っても過言ではない —— 人がその日常において最も多く口にするのは、他の人々が語ることがらである、と。」(M.M. バフチン1979: 146-147頁)

バフチンのことばにあるように、我々は何事かについて語ることが多い。次の小説の一節をみても、さまざまに語られることばが使われている。

- (2) 「こうやって、年齢とか職業とか書くのって抵抗あるよなあ。俗に言う、個人情報でしょ」

「俗かどうかは別にして、その欄は会社員とかそういうアバウトな感じで、いいですから」

(略) さてはおじさん、暇ですね。立ち去ろうとしない男性に思わずそう言いたくなるが、ぐっとこらえた。「まあ、珍しいです」と返事をする。残業代も出ないので、仕事というよりは罰ゲームに近いですよ、と。(アイネ 9 頁)

* 専修大学文学部特任教授

(2) の一文目、「書くのって抵抗ある」の「書くのって」は、「というの
は」という形がもとにある。次の会話の二つ目の発話も同様の例である。

(3) 土地に不案内な人：すいませんが、駅{は・？って} どちらです
か？

土地の人：駅{*は・って} 神田？

土地の人は、相手の言う「駅」が特定できないので、「は」は使えない。
未知の話されたことばは、引用表現を用いて話の場に取り入れられる。そ
して、それが文の主題にもなりえるということがわかる¹⁾。こうした形式
には、ほかに「とは」「なんて」などがある。

(2) の二文目の「俗に言う」は、内容ではなく、表現の仕方を示すメタ
表現である。これに類することばは「正直言って」「というべきか」「と言
えばいいのか」など、非常に多い。板坂（1971：7頁）は、「芥川の言葉
じゃないが」を取り上げて論じている。これは、「今の話ではないですけ
れど」といった形式で日常よく使われるもので、自分の主張への控えめな
援用と考えられる。杉戸（1989：5頁）は、「コンナコト言ウベキカドウ
カワカリマセンケレド…」といったさまざまな決まりことばを取り上げて
いる。メタ表現の中には、「といえは」「というと」「といっても」「とはい
え」「ときたら」「ときては」など複合辞として一語化して使われるものも
ある。

(2) の三文目の「とかそういう」は、広くは引用の連体用法と言える。
次の(4)は、連体用法の実例、(5)は、日本語非母語話者の学生が書いた
文で、連体用法に誤用がある。

(4) そう、何か、(筆者注：店が) もうなくなってたよっていう報告
をママにした。(日常)

- (5) 被告人は、日本商事が開発製造する新薬は、副作用症例をもたらす情報を手に入れ、この情報が公表される前に日本商事の株式を信用売りしていた。(学生の作文から)

発話、思考の内容を表す連体用法では、「という」を挿入すべきか否かが大きな問題になる。「という」の挿入は、底の名詞の性質や連体修飾節の内容節の統語的条件、たとえば、命令、依頼の表現か、終助詞が使われているかといったことに左右される(寺村1992, 大島1991, 丹羽1993など)。「という」以外にも、「との」「といった／った」「というか／てか」などの形式がある。

(2) の終わりに近い「「まあ、珍しいです」と返事をする」は、引用の典型である。

(2) の最後の文の、「残業代も出ないので、仕事というよりは罰ゲームに近いですよ、と。」の文末の「と」は、実際の発話を引用しているわけではない。引用の述部動詞はなく、話し手の思考内容が引用句に提示されていると考えられる。次の例もそうした例である。

- (6) お、おじが浄土真宗なので、あの一、…法名もらうんですが、みんなその一、実際はそんなに生きてる間にはもらわないですけど、みんな死ぬことを考えてないので、もらわないんですけど、でもちょっと用意周到な人なので、生きてる間に法名をもらいますと。
で、もういい歳なので、そろそろ～(面白)
- (7) パーティの準備は大丈夫かな。お酒は用意したと。

引用には、項目列記の「と」と言われるものがある。次がそれにあたる。

- (8) 十五、十六、十七と 私の人生暗かった

藤田(1998, 2000:566頁)は、こうした項目列記の「と」は、「それが係っていく述部・節の表わす事柄のあり様を詳しく説明する情態副詞的な修飾句」と述べている。項目列記の場合は、文を倒置して「私の人生暗かった、十五、十六、十七と」とすることもできるが、先の(6)(7)は、倒置文ではなく、述語もないので、元に戻すことはできない。これは、ことがらの内容だけが提示されているという点で「とか」につながるものを感じさせる。

こうしてざっと見ただけでもさまざまな語られることばがある。引用の形を使った主題化や連体用法は、大まかに、未知なるものを話の場に引き込む働きをしていると言える。この働きは、文末の引用表現にも見られる。たとえば、自分の名前を人に告げるとき、次の二通りの方法が可能である。

(9) a 田中と申します(言います)。

b 田中です。

上のaは、名付けと呼べるもので、発話の場にいる人が話し手のことを知らないときにしか使えない。bではそうした制約はない。しかし、文末の引用と伝聞は、名付け以外の働きを持っている。本稿では、日常さまざまな使われる語られることばの中で、特に文末の引用と伝聞を取り上げ、引用と伝聞が文の中、談話の中でどういう働きをしているのかを考えてみたい。

引用と伝聞の働きは、大まかには次のように考えられる。

引用：実際に特定の発話者がいて、発話があったことを示す。

伝聞：それが他者から得た情報であることを示す。

引用、伝聞の形式はさまざまだが、ここでは、主に狭義の引用として「と言う」「と思う」の類、伝聞として「そうだ」を取り上げ、これ以外の表現として「って」「んだって」についても若干ふれる。

2. 引用

2-1. 「と言う」の直接性

「と言う」が持つ引用の働きは、ほかの表現と比べてみることでよくわかる。

- (10) 彼は私に、明日の会に参加しろと言った。
- (11) 田中は、明日は忙しいと言った。
- (12) 彼は私に、明日の会に参加するように言った。
- (13) 田中は、明日は忙しいように言った。

(10) と (11) は、実際の発話をほぼそのまま引いていると考えられる。しかし、(12) と (13) の「ように」文では、元発話者が実際に何と言ったのかはわからない。「ように」節の中身は、発話の概要でしかない。前田（2006：66頁）は、「「ように」節の部分は実際の発話そのものではなく、その発言を発話者が「要するにこういうことだ」と、解釈・判断していることを表しているものであり、そこには「ようだ」が持つ「類似のものを提示するという働きが起こっている」と指摘している。

「と言う」が実際の発話をほぼそのまま引いていることは、次の例からもみてとれる。

- (14) 彼は私に、明日来ると聞いた。

(15) 彼は私に、明日来るか聞いた。

ここでも「ように」文と同じく、(15)では実際に発話された文は明らかでなく、内容の概略にとどまっている。次の(16)のように、発話の内容の直接引用性が高くなると、すなわち、丁寧体が使われると、「と」は省略することができなくなる。

(16) 彼は私に、明日来ますか{と・* \emptyset }聞いた。

こうした例から、「と言う」類が実際にあった発話を引くものだということがわかる。そこで、話の場にいる人の言動、あるいは、その場にいる人の情報を、引用表現を使って表現することは考えにくい。

(17) A：暑いね。

B：君は暑いと言うんだ。

(18) ??この人は、1年前から東京に住んでいると言ってる。

(18)の例は、話の場にいる第三者が1年前から東京に住んでいることを、話し手が聞き手に伝えようとする場合である。発話者本人である第三者がその場にいるのに、引用を用いた発話をするのは、この第三者の発話の内容、あるいは発話の妥当性を話し手が疑っていることを含意する。もしくは、第三者と聞き手とが直接情報のやり取りができない場合、たとえば、通訳するような場面を想定しなければならない。日本語ではこうした場合、後に見るように、伝聞を使う。

次に、引用の働きを、会話場面の中で具体的に考えてみる。

2-2. 引用の働き 場面の移動

引用は、実際に発話があったことを示すのが基本だが、その発話がどこで行われたかによって、今現在の話しの場に、別の場面が持ち込まれる、すなわち、場面の移動が起こる。

発話時（会話時）と できごと時

(19) 女性：ねえ、みんな、花火、土曜日にやろうって言うの。

男性：火曜？

女性：どよお。

(19) では、「って言う」によって、二人の発話の場面以前に、別の場面（みんなで花火をやる日を決めたとき）があったことが示される。次の (20) では、この発話によって、今までの目の前のやり取りとは別の空間が発話の場に持ち込まれる。

(20) ヨウちゃんにラインの使い方を伝授されるとは。

この発話は、電車の中で、男性が女性に聞かれるままスマホの使い方を教えていて、知りたかったことがわかった、しっかり者らしい女性が、おっとりした男性に向けて発したことばである。言語化されていないが、「思わなかった」といった述語が想定できる。この発話がなされたことによって、それまでのスマホの使い方を教え合っていたやり取りが背景化され、場面の切り替えが起こったと感じられた。

発話時 と 想定時

(21) 夫：玄関が閉まってなかったよ

妻：私が閉めなかったって？

夫は、妻が玄関を閉めなかったとは言っていない。その点で、人の想定を引用していることになる。メイナード（1997：156頁）は、「犯人はお屋敷の人だというんですか。やめてください…」という例をあげ、想定引用と名付けている。これも想定内容が発話の場に持ち込まれるという、場面の移動が感じられる。先に、例文（6）（7）で、思考の内容を提示する文末の「と」の例を示したが、これも発話の場とは異なるもう一つの思考の場が存在することを示している。砂川（1988）には、引用における「場の二重性」について統語論的分析に重点を置いた優れた論考がある。話を単一の場面に限定せず、重層的に表現する手段は、条件句や反事実仮定などさまざまあるが、引用もまたその一つの手段ということになる。

2-3. 描写の写実性：話法

英語では直接話法と間接話法が明確に区別される。その点を Li（1986：30頁）は、次のような例をあげて説明している。

(22) a John said that this theorem was false.

b John said that this theorem was not true.

(23) a John said, “This theorem is false.”

b John said, “This theorem is not true.”

(22) の間接話法では、a 文と b 文は同義だが、同じことを表す直接話法である (23) の a 文と b 文は同義になりえないというのである。日本語では、「ジョンは、この命題は間違っていると言った」「ジョンは、この命題は正しくないと言った」は、直接話法か間接話法か判然としない。F.Coulmas（1986：170頁）は、「がんばればわかるようになると彼は言った。」（原文はローマ字）という日本語文に対して、6通りの間接話法の解釈、2通

りの直接話法の解釈が可能だと述べている。

英文法にならって、日本語でも引用に関して、直接話法、間接話法の区別が論じられることがある。英語で直接話法と間接話法が明確にわけられるのは、英語が文に主語が必要なこと、かつ、その主語やテンスに対応して述語が形式変化を起こすからである。日本語では、直接話法と間接話法の区別が英語のようにきれいにはわけられないが、しかし、ルールがないわけではなく、それについての論考もある（たとえば、遠藤（1982）、砂川（1989）など）。山崎（1996：8頁）は、ダイクシス表現は、元発話の話し手の立場からでも、話し手の立場からでも表現できることを次の例をあげて指摘している²⁾。

(24) a A子→B作 「それじゃ、明日お宅にお伺いします」

b B作→C子 「A子が明日お宅にお伺いしますって言ってたよ」

c B作→C子 「A子が今日うちに来るって言ってたよ」(翌日)

bは元発話の話し手、cは話し手による発話である。直接話法のbでは、「行く（お伺いします）」が使われ、間接話法のcでは、話し手のB作の視点から「来る」が用いられている。しかし、ダイクシス表現でも、命令、質問、依頼といった行為指示型の文では、そうした調整が起こらない（砂川1989：373-374頁）。彼が「明日来い」と命令した場合、「彼が明日来いと言った」とは言い換えられるが、「彼が明日行けと言った」とは言えない。すなわち、命令、質問、依頼といったモダリティ性の高い文では、元発話者の視点が重視されている。こうしたグラデーションのある使い分けをしているのも、日本語の引用の特徴と言えるだろう。日本語の話法には、このように細かく見ていくべき点があるが、基本的には、直接話法に近づくほど、臨場感をもった叙述によって元発話が再現され、間接話法が使わ

れることによって、叙述内容は話し手の視点にたった表現に近づくことになる。定延（2003）は、この点を、少し違ったことばで、すなわち、直接引用が話しことば的であるということを、体験と知識という概念で説明している。定延の分析によれば、「言語情報は体感度が高いほど知識らしくなくなり、体験らしくなる」（61頁）という。

3. 伝聞

文は、基本的に、ことがらを表す客体的な部分と、話し手の判断、気持ち、聞き手への伝え方といった主体的な部分とが統合して作られている。本稿で取り上げている引用と伝聞のうち、引用は、ことがらを表す部分に含まれる。一方、伝聞は、話し手の判断を示すという点でモダリティに含まれる。しかし、その性格は微妙である。ここでは次の二点を述べる。すなわち、第一に、伝聞は、ほかの認識的モダリティとは異なる性質を持つこと、第二に、伝聞も他の認識的モダリティと同様に、発話・伝達のモダリティ化すること、の二点である。第二の点については、語用論的観点からこの問題を論じている神尾の議論も取り上げて検討したい。

3-1. evidentiality（証拠性）³⁾

日本語記述文法研究会（2003：4-134頁）は、伝聞の「そうだ」を、「だろう」「かもしれない」「ようだ」などと並んで、認識のモダリティに入れている。これらのモダリティ表現は、何らかの根拠があつての表現という点で、証拠性の表現と言える。日本語の evidentiality（証拠性）について書かれた初期のものとして、Aoki（1986）があげられる。Aoki は、日本語の evidentiality として、三人称の感情であることを示す「がる」や「のだ」の「の」とともに、伝聞の「そうだ」、推量の「ようだ」「らしい」「そ

うだ」などをあげている。森山（1989）は、認識的ムードを三類に分類し、「そうだ」を、狭義判断（かもしれない、にちがいない）や状況把握（ようだ、みただ、らしい）とは分けた。これは形態的な共起関係からの分類だが、森山は、共起関係は、意味関係を反映していると考えている。仁田（1992）も、認識的モダリティの分類を行っているが、森山とは異なり、判断のモダリティに属する表現と伝聞とは性格が異なるとして別にしていく。その伝聞の性格の検証に使われているのが、仁田では「言表事態成立の否定化」、森山では「キャンセル可能性」と呼ばれる以下のテストである。このテストはすでに Aoki で行われているが、先行事態を、後接部分で否定できるかどうかをみたものである。ここでは森山の例をあげる。

(25) a* 彼が部屋にいるかもしれないが、それは違うと思う。

b* 彼が部屋にいるようだが、それは違うと思う。

c 彼が部屋にいるそうだが、それは違うと思う。（森山1989：69頁）

(25) の a, b 文に見るように、自らの判断を自分で否定するのは不自然だが、伝聞の「そうだ」による判断は、それを否定することができる⁴⁾。これは、「そうだ」がほかのモダリティとは異なり、話し手の判断というより、情報の根拠を示すことが表現の意図するところだからだろう。推量の「ようだ」と伝聞の「そうだ」は、どういう要素を前後に接続させるかという点では共通する点が多い。しかし、ある語がどういう語を包摂しえるかということと、文の中で持つ意味とは異なるレベルの話と考えられる。仁田（1992：5頁）は、「伝聞は、描き取られている内容が第三者の情報からのものである、といった言表事態の仕入れ方に関わっているだけである」と述べ、森山（1995：26頁）は、「伝聞形式においては、話し手がどういう言語的情報を得ているかという認識だけが示されるのであって、伝

聞内容自体は、話し手自身が生成する判断ではないのだと言える」と述べている。

寺村（1984）は、引用と伝聞の違いを表す例の一つとして、次の例をあげている。

(26) 田中サンハ「私が悪カッタ」ト言ッテイル（寺村1984：258頁）

(27) *田中サンハ（自分ガ）悪カッタソウデス

寺村は、(27)の文が成立しない点を、言った主体を明示することが「そうだ」ではできないからとしたが、中畠（1992：20頁）は、次の反例があることから、伝聞では、元の発話者の心的態度を示せないからだとしている。

(28) 田中さんは「数学の点が悪かった」と言っている。

(29) 田中さんは数学の点が悪かったそうです。

先に引用の話法のところで、命令、質問、依頼といったモダリティ性の高い文では、元発話者の視点が重視され、直接話法が用いられ、間接話法が用いられないことを指摘したが、伝聞もこの点では間接話法と同じく、モダリティ性の高い表現とは共起できないということになる。

森山は、認識的モダリティを共起関係によって分類したが、共起関係に注目すると、伝聞には他のモダリティにない性質がある。すなわち、それ自体の相互承接、つまり二重の伝聞が可能であるという点である。こうしたことは、ほかのモダリティでは起こらない。

(30) 彼は明日の会に参加するそうだそうだ。

(31) 彼女も来るそうだそうよ。

伝聞の「そうだ」の二重承接が可能なのは、「そうだ」が話し手の判断というより、伝え聞いたという客観的な事態のありかたを示しているためと考えられる。この点でも伝聞の「そうだ」は、ほかの認識的モダリティとは異なっている。

従来、モダリティを、認識モダリティとその外側で働く発話・伝達のモダリティとに分ける。この発話・伝達のモダリティというのは、ていねいさや伝達態度を示すモダリティである。そして、「ようだ」「だろう」といった認識的モダリティは、発話・伝達のモダリティ化することが指摘されている。(仁田1992)

(32) 時間が来たようですので、そろそろ始めさせていただきます。

(33) ここ間違ってるだろ

(32) の「ようだ」には、推量の意味はなく、ていねいさを示すモダリティにかわっているし、(33) の「だろ」は伝達態度を示し、終助詞に近い働きをしている。では、伝聞の「そうだ」においても、このモダリティの性格を変えるということは起こるのだろうか。その点を次に見ていきたい。

3-3. 配慮表現としての伝聞（伝聞の、発話・伝達のモダリティ化）

話し手、聞き手、第三者の三人が会話をしている場面を考えてみる。聞き手と第三者は、初対面、それ以外の、話し手と聞き手、話し手と第三者は既知の関係とする。話し手が聞き手に、第三者が1年前から東京に住んでいることを伝えるとき、大きく次の二通りの表現が可能である。

(34) <話し手が聞き手に向かって、その場にいる第三者について語る>

- a この人は、1年前から東京に住んでいるんだ。
- b この人は1年前からこの町に住んでいるんだって／住んでいるそうだ。

この二つの文の違いは、話し手が、話し手と第三者の関係を、聞き手にもう伝えようとするかにかかわっている。(34) aなら、話し手と第三者が親しい関係にあることを話し手の発話は含意するし、逆に(34) bの伝聞表現を使うなら、話し手と第三者の関係がそれほど密でないことを話し手は含意する。神尾(1998)は、次のような例をあげて、すでにここでの例と同様な現象を指摘している。神尾の例では、会社の社長と秘書、そして外部の取引先の人物の三者が登場する。社長と取引先の人物とが面談しているとき、秘書が「社長、3時から会議がございます」と告げに来る。これは情報を明確に表現しているので直接形を用いる。3時近くになって、社長は取引先の人物に「私は、3時から会議がありますので」と直接形で言える。しかし、3時が近づいたことに気づいた取引先が、つぎの(35)のように言うことは可能だが、(36)は不自然である。

(35) 社長は3時から会議がおありだそうです／おありのようです(から)。

(36) ??社長は3時から会議がおありです(から)。(神尾1998:13頁)

本稿であげた例(34)と神尾のあげる例は、情報の帰属先が第三者か話し手かという点で、設定に違いはあるものの、直接形の表現は聞き手との距離が調節されておらず、どちらも不自然になっており、伝聞が配慮表現に使われているという点で共通する。

仁田(1992)は、認識的モダリティが発話・伝達のモダリティ化すると、婉曲表現が使われると述べている。先の例(32)(33)。「そうだ」を使っ

た(34) b (35) は、第三者との距離を聞き手に配慮して調節しているという点で、あいまいにことがらを叙述する婉曲表現というよりは、配慮表現と呼ぶのがふさわしいだろう。しかし、どちらも広くはていねいさに関わっていると言える。

3-4. 情報のなわばり理論

上で伝聞の「そうだ」が認識のモダリティとは異なるものであること、同時に、認識のモダリティと同様、発話・伝達のモダリティ化することを見た。これは、先にも引用した神尾の「情報のなわばり理論」(神尾(1990)(1998))と関わるところがある。「情報のなわばり理論」は、引用や伝聞の実際の使われ方を考えるうえで、極めて示唆に富む考え方である。若干、伝聞の扱いに関しては疑問に思うところもあり、神尾の理論を振り返っておきたい。

情報のなわばり理論は、ある情報を自分に<近>と捉えるか、<遠>と捉えるかによってとる表現型が異なることを指摘したものである。<近>のときには、直接形(断言の形をとる文形)が、<遠>のときには間接形(断言を避けた不確定な文形)が使われる。父親が会社で同僚に息子の入院を伝えるとき、通常、次のような直接形を使う。

(37) 太郎は退院しました。(神尾1998: 7 頁)

しかし、他人から退院の話を聞いた人は、次のような発話をするのが自然である。

- (38) a 太郎は退院したらしい。
 b 太郎は退院したようだ／ようです。
 c 太郎は退院したみたいだ／みたいです。

d 太郎は退院したって。(神尾1998：7-8頁)

問題は、単身赴任先の父親であっても同僚に、上記の間接形「太郎は退院したらしい」は使わないという点である。それは、「息子の入院とそれに当然先行する息子の病気は父親にとって極めて身近な、換言すれば父親のなわ張りに入る情報であるから」(同10頁)という。ただ、この不自然とされる間接形の中で、「太郎は退院したって」という伝聞表現は、「太郎は退院したそうだ」と同様、不自然な表現とは言えないと思われる。

(39) 同僚：どうなの、息子さんの様子？

父親：(妻から電話があって,) 昨日退院した {そうだ/って}。

神尾(1998：7頁)は、「らしい」「ようだ」と「そうだ」「って」をともに、「発言を和らげると同時に不明確にもするような要素」としている。しかし、この例の場合の伝聞は、あいまい表現ではなく、まさに伝え聞いたことを示す伝聞であるがゆえに不自然さは生じないと考えられる。「ようだ」「らしい」「みただ」といった推量表現は、婉曲表現として使うことがある。それゆえ、父親が使う a~c は不自然となる。しかし、d の伝聞は、他者から聞いたという証拠性のあることがらを提示しており、自己の判断ではなく、ことがらのあり方を示しているため、不自然にはならない。神尾が間接形に含めた「って」「そうだ」は、やわらげの要素とひとくくりにはできない、まさに伝聞の働きをしている表現と言える。

4 その他の形式 「って」「んだって」

4-1. 「って」

「って」は、次の（40）の解釈1のように、引用に用いられるが、解釈2の伝聞、解釈3の発話者自身の発話を伝える自己引用にも使われる。この点で、引用と伝聞の中間的な表現と言える。

- （40）田中は来るって。 解釈1 田中は来ると言っている。（引用）
 解釈2 田中は来るそうだ。（伝聞）
 解釈3 田中は間違いなく来るよ。（自己引用）

「って」の伝聞用法が「そうだ」と異なる点は、「そうだ」ではできない命令、意向、疑問文などに「行けって」「行こうって」「行くかって」と、接続できることである。また、「って」は疑問に使われるが、「そうだ」は疑問にならない。解釈3の自己引用の用法は、基本的に話しことばでしか使われない。

- （41）「ぶりっこしてもあんたは似合わへんの。僕、日本でたくさん仕事があるし、もう一通り説明しましたから」
 「そんな、すぐできませんって。中国語もわかりませんって」（商社）

話し手自身の発話に引用標識を使うことは、余剰情報となる。「よ」に言い換えられることから、発話・伝達のモダリティ性が強いと言える。

4-2. んだって

「ん(の)だって」も引用、伝聞に使われるが、また、(43)のような自己引用の用法もある。

(42) この計算、間違ってるんだって。(引用と伝聞)

(43) 女性：彼女にそのこと言ったら？

男性：そんなこと言ったら、けんかになるんだって。(自己引用)

女性：そうよね。

語の構成は、「のだ」に引用の「って」が付加している。「のだ」は、「の」の前に来る節を名詞化するので、客観化したことがらに発話を表す形式を付加することで、「んだって」全体として証拠性を持つ伝聞表現になっている。これは、「って」とは異なり、命令、意向、疑問文に接続できず、言い切り形にしか接続しないという点で「そうだ」により近い。

5. まとめと今後の課題

本稿では、引用、伝聞の働き、その意味を、語用論的側面を視野に入れつつ、考えてみた。本稿で述べたことをまとめると、次のようになる。

- ①語られるコトバは多種多様で、その使われ方もさまざまである。
- ②引用によって発話時、出来事時、想定時が区別され、話が平面的ではなくなり、発話が重層的になる。
- ③伝聞は、話し手の推量に基づく「だろう」「ようだ」「らしい」が話し手自身の判断であるのとは異なり、伝え聞くという証拠に基づく。その点で、伝聞は、ほかのモダリティと性質が異なる。
- ④直接引用は、元発話者が特定され、その働きは、元発話者の視点から生

き生きと発話を叙述することである。一方、間接話法や伝聞の「そうだ」は、元発話者の命令、質問、依頼といった心的態度を表す要素は含みえず、話し手の視点から発話内容を伝える。

- ⑤伝聞は、ほかの認識的モダリティとは性格が異なるものの、聞き手にどう伝えるかという点で、話し手の態度が示される。すなわち、伝聞表現によって、聞き手に話し手と情報源との距離を調節して示すことができ、伝聞の「そうだ」によって元発話者との間に心理的距離を置くことができる。
- ⑥「そうだ」という形式は、動詞の基本形にしか下接できないという制約がある。日本語では「って」や「んだって」などが、引用と伝聞の間を埋めていると考えられる。

引用、伝聞についてはまだ多くの問題が残されている。

話し言葉を観察すると、伝聞の「そうだ」が使われることは少なく、「って」「んだって」が用いられることが多い。今後、話し言葉における伝聞表現の実態の比較が必要だろう。

また、日本語の伝聞の、外国語との対照研究に基づく分析も必要だろう。すでに神尾（1990）も指摘しているが、同じことがらに対して、次の例にみるように、英語では日本語の「そうだ」にあたる表現が使われないことが多い。

(44) a 「なに、男が一人でとまっていたって？」ときいた。

「はあ、一人だそうです」(点と線)

b “Did you say the man was alone?” he asked.

“Yes, he was alone.” (*Points and Lines*)

どこまでを命題に含めるかという点で、日本語と英語には違いがみられる。

語りのスタイルの違いという点も含めて、言語による思考法の違いにも注目して伝聞や引用を考えていきたい。

注

- 1) 「って」は文の主題になるけれども、主題の「は」と異なるのは言うまでもない。
 - (1) 今日は天気がいい。
 - (2) a 象は鼻が長い。
b 象って鼻が長い。
- (1) 文は、現に目の前のことに対して述べる文だから、「って」を使った「今日って、天気がいい」とは言えない。
- (2) b 文は、「象って鼻が長いねえ」のように終助詞を付加すると、自然な表現になる。この点について、藤田保幸氏は「って」を間投助詞ととらえ、「って」自体に発信性があると考えておられる。(2018年5月12日の中部日本・日本語研究会にて)
- 2) 山崎の例は「って」を使ったものだが、「と」でも同様の文が成立する。
- 3) Evidentiality という語が、時に現場性と訳されることがあるが、ここでは証拠性という訳が適切と考え用いた。
- 4) 「らしい」もキャンセル可能性があるが、「らしい」には推量の働きもある。そのため、ここでは、「らしい」を伝聞としては扱わなかった。

資料（本文中の略称がない用例は作例）

アイネ：伊坂幸太郎『アイネクライネナハトムジーク』幻冬舎
 日常：現代日本語研究会『談話資料 日常生活のことば』ひつじ書房2016
 面白：わたしのちょっと面白い話 <http://www.speech-data.jp/chotto/2015年のデータ>
 商社：谷崎光『中国てなもんや商社』文芸春秋1999
 点と線：松本清張『点と線』新潮社
Points and Lines : Makiko Yamamoto & Paul C. Blum *Points and Lines* Kodansha International LTD.

参考文献

- AOKI Haruo 1986 Evidentials in Japanese *Evidentiality: the linguistic coding of epistemology*. Ablex Publishing Cooperation
 板坂元1971『日本人の論理構造』講談社
 伊東一郎訳1979『小説の言葉 ミハイル・バフチン著作集⑤』新時代社
 遠藤裕子1982「日本語の話法」『言語』11-3 大修館書店
 大島資生1991「連体修飾構造に現れる「という」の機能について」『人文学報225』東京都立大学人文学部国語学研究室 27-58

- 神尾昭雄1990『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』大修館書店
- 神尾昭雄・高見健一1998『「談話と情報構造」中右実編『日英語比較選書2』 研究社
- Coulmas, Florian 1986 Direct and Indirect Speech in Japanese *Direct and Indirect Speech*. ed. By Florian Coulmas Mouton, de Gruyter
- 定延利之2003「体験と知識—コミュニケーション・ストラテジー」『国文学 解釈と教材の研究』48-12 明治書院
- 杉戸清樹1989「言語行動についてのきまりことば」『日本語学』8-2
- 砂川有里子1988「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9 明治書院
- 砂川有里子1989「引用と話法」北原保雄編『講座 日本語と日本語教育』4 明治書院
- 寺村秀夫1992『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編—』くろしお出版
- 寺村秀夫1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 中嶋享幸1992「不確かな伝達—ソウダとラシイー」『三重大学日本語学文学』3
- 仁田義雄1992「判断から発話・伝達へ —伝聞・婉曲の表現を中心に—」『日本語教育』77号
- 日本語記述文法研究会2003『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 丹羽哲也1993「引用を表す連体複合辞「トイウ」」『大阪市立大学文学部紀要』45-1
- 藤田保幸2000『国語引用構文の研究』和泉書院
- 前田直子2006『「ように」の意味・用法』笠間書院
- メイナード, 泉子・K. 1997『談話分析の可能性』くろしお出版
- 森山卓郎1995「「伝聞」考」京都教育大学国文学会誌26
- 森山卓郎1989「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 山崎誠1996「引用・伝聞の「って」の用法」『国立国語研究所研究報告集』17
- Li, Charles N. 1986 Direct speech and indirect speech: A functional study *Direct and Indirect Speech*. ed. By Florian Coulmas Mouton, de Gruyter